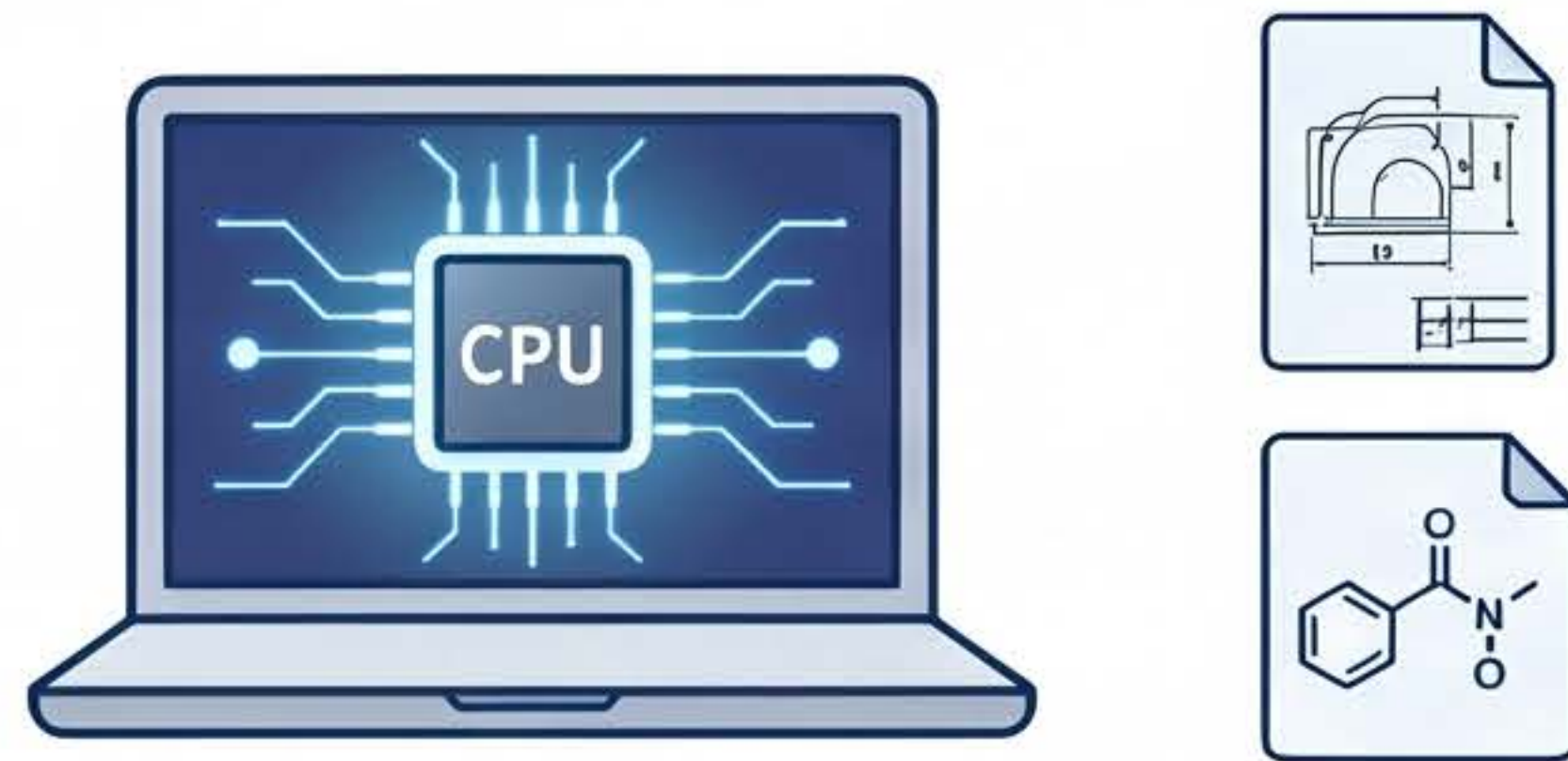


# 2026年知財情報フェア：ローカルLLM活用の最新動向と製品比較

2026年の知財情報フェアでは、未公開発明を扱うための「ローカルLLM」活用ツールが具体化しました。

製品によって実行環境（PC、専用機、社内システム）や、AIが担当する業務範囲（発明届出、請求項作成、明細書本文）が明確に分かれています。

## AIPs（アイビーリサーチ）

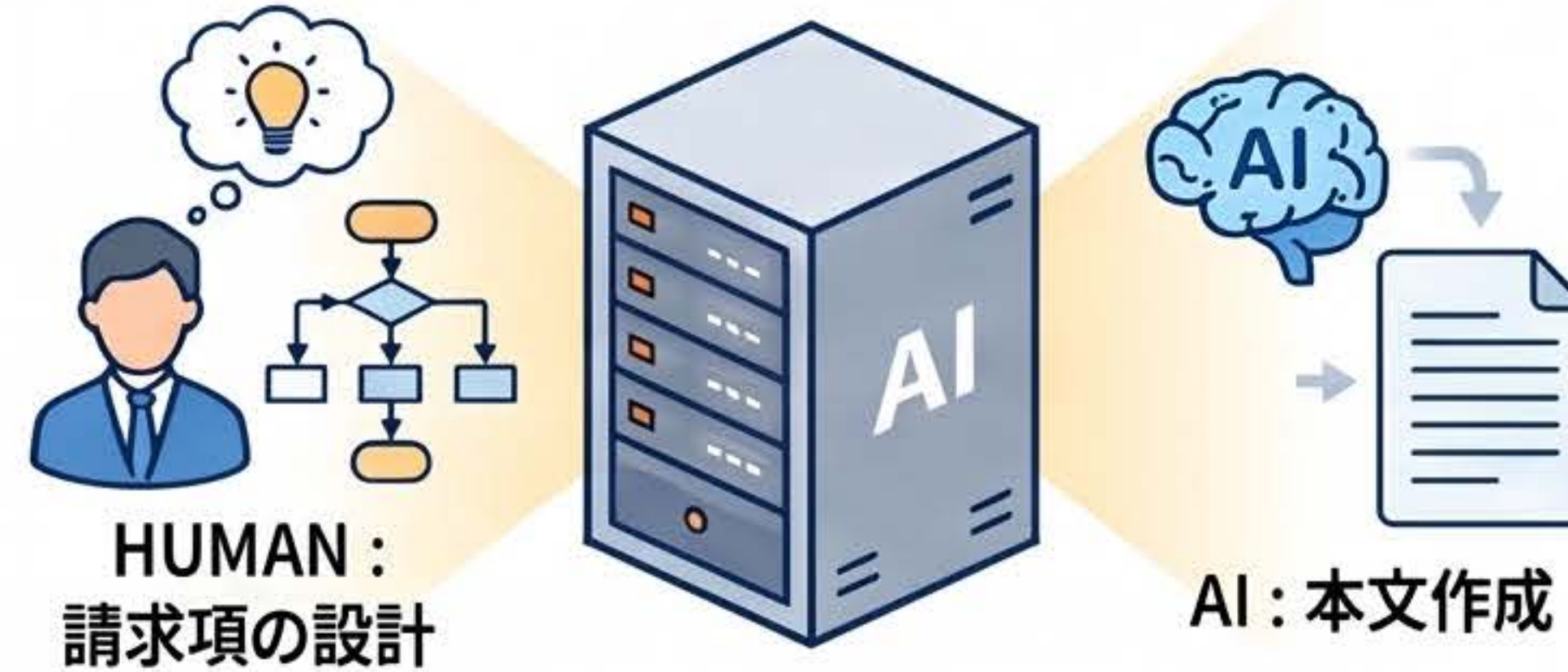


### PC完結型のドラフト作成

オフラインPCのCPUで動作し、図面や化学式から明細書ドラフトを生成します。

実行環境: 個人PC（CPU動作）  
主な特徴・対象業務: 図面・化学式入力、段落単位の生成

## N-Patent（トランスエヌ）

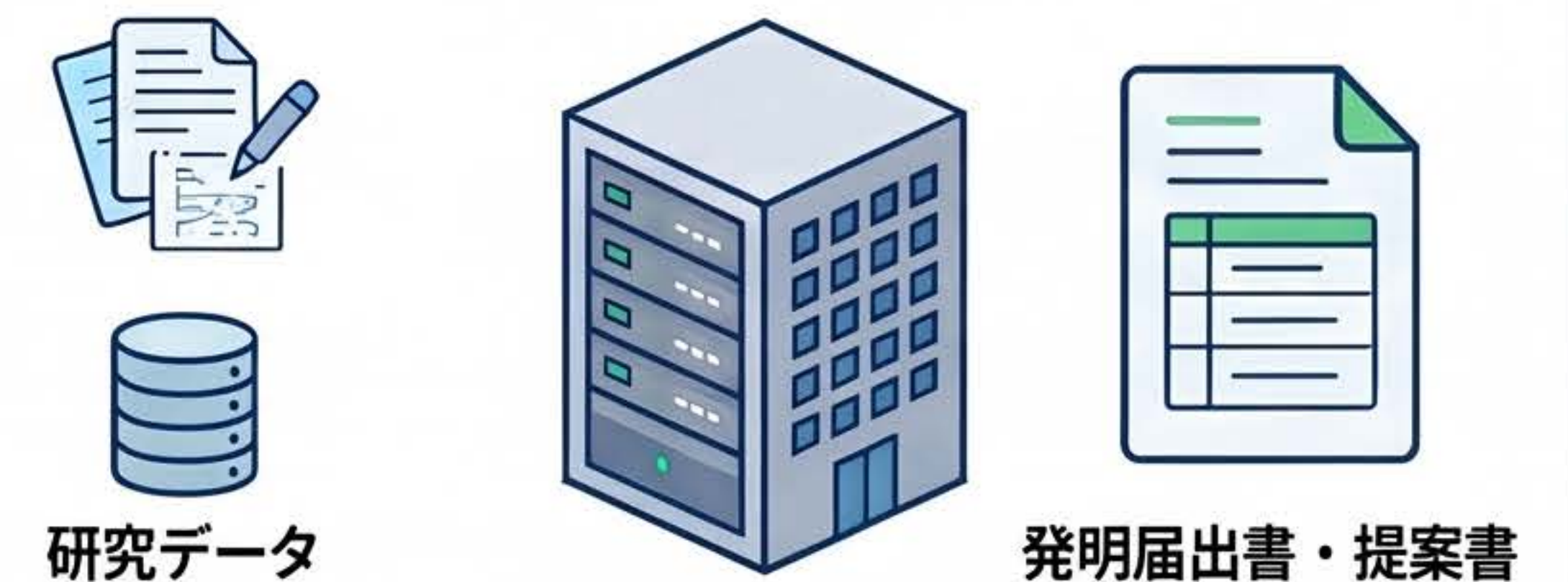


### 専用機による役割分担

専用ハードウェアで提供。請求項の設計は人が行い、本文作成をAIが担います。

実行環境: 専用ハードウェア  
主な特徴・対象業務: 完全オンプレミス、請求項設計は人間が担当

## IPEDIT invent（アイパクトリ）



### 発明届出の構造化

企業内サーバーに構築。研究段階の情報を知財担当者が扱える形式に整理します。

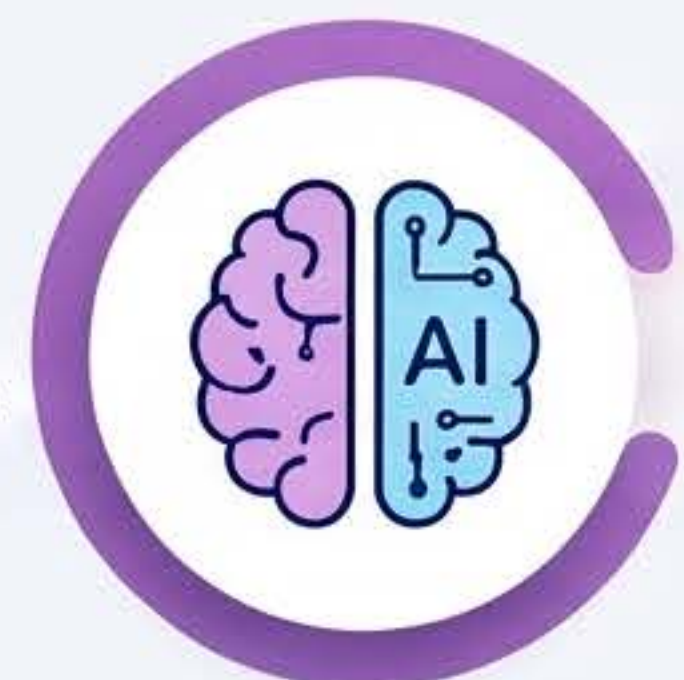
実行環境: 企業内オンプレミス  
主な特徴・対象業務: 発明届出書・提案書の作成支援、業務構造化

## 特化型AIを評価する3つの視点



### モデル学習 vs 外部参照(RAG)

登録公報を学習したモデルか、社内資料をRAGで参照するかを区別します。



### 人とAIの適切な作業分担

AIが全文を書くのではなく、人がどの工程で判断・修正を挟むかが重要です。



### 画像・化学式の認識精度

画像入力の可否だけでなく、技術内容を正確に理解し整合性が取れるか確認。